

進路相談における学習者の自己探求

内 藤 晶 子

キーワード：アイデンティティの危機、青年期の発達援助、行動カウンセリング

はじめに

本稿は、筆者が都内の日本語学校で日本語教育に従事していた2001年に行った、学習者に対する進路相談における、学習者の自己探求の過程を考察したものである。筆者は、専任日本語教員として日本語を教える傍ら、進学希望の学習者の進路相談を行っていた。井上(1999)は留学生の課題として、最も重要なのは学業達成であり、自国から日本への移動、卒業後の進路も含め「人生移行期の存在」として捉える必要があると述べている。

「財団法人日本語教育振興協会」の平成16年度事業報告書によると、2001年、日本語教育機関数は327、学習者数は33,757名であった。2001年時点では今現在の約半数の学習者数だった。筆者の日本語学校では、2002年3月に日本語学校卒業予定の学習者104名のうち85名が大学院、大学、専門学校への進学希望であり、筆者の進路相談の対象となった。

日本の大学に留学を希望する場合、筆者が進路相談を行っていた2001年度は財団法人日本国際教育協会が実施していた「日本語能力試験」1級合格と、「私費外国人留学生統一試験」受験が必要だった。これらに加えて、各大学の筆記試験や面接試験も受験しなければならなかった。2002年度からは「日本留学試験」に統一されているが、どの学校に進学するのか、進学先で何を勉強するつもりなのかについて、学習者が進路相談を必要としていることは試験制度が何であろうと同じだろう。本稿の進路相談における学習者の「自己探求」の過程への教師の介入は、今現在でも、日本の高等教育機関への進学を希望している学習者を対象としている日本語教育機関においても必須のものと考えられる。

次節では、「進路相談」についてみていく。

1. 進路相談

本稿のテーマである「進路相談」とは個(1999)によると、進路や生き方の選択やその他進路の諸問題を抱える個人に対し、個別にあるいはグループ相談を通して、進路への関心を高め、自己お

よび現実社会についての理解の深化を促し、人生設計やそれに伴う進路選択の能力を伸長して、将来の行き方を探索し、実現できるよう援助することを目的とする。個人の進路発達を促進するための開発的意義をもつ場合と、進路や生き方にかかわる悩みの解決や障壁の克服など問題解決的な意義を持つ場合があり、これらは相互に密接な関係をもつ。野々村（1984）は「進路相談」には、学級の全生徒を対象にした定期相談と、個々の生徒が適当な時に来談する随時相談、さらに、本人が自発的に来談する自発的相談と、問題があるときに教師の方から本人に働きかける呼び出し相談の4種類の進路相談の形態があるとする。本稿で進路相談の事例を見ていくとき、野々村に基づき、「定期進路相談」「随時進路相談」「自発的進路相談」「呼び出し進路相談」の用語を使用する。

日本語学校の学習者は進学目的で日本語を学んでいる学習者が多い。彼らの年代は20代前半で青年期にあたる。次に、学習者を発達援助の対象としてみていく。

2. 学習者への発達援助

岡堂（1987）は青年期のアイデンティティの危機として、青年は、自分とは何か、何になりうるかの問いをくりかえし、援助を求めることも多くなる、進路決定はことさら危機の源泉になっていると述べる。仮に自分で進路を決めた場合でも、自分が新しい課題にふさわしくないことに気付いたり準備が不十分だと知れば、心理面のクライシスになると述べる。

末弘（2006）は、自我と社会との相互関係によってもたらされる心理・社会的発達概念の概念化として「自我アイデンティティ」という用語を使う。自我アイデンティティの危機は、はっきりとした危機の段階は青年期の終わりにあるが、自我アイデンティティそのものは生涯にわたって続く無意識的な発達段階であるとする。異文化接触は、今までの価値観とは違う社会・文化との接触という意味で、自我アイデンティティを意識せざるを得なくなる状況であり、状況が変われば当然自我アイデンティティの再構築を迫られると考える。

末弘（2006）は、米国への日本人女子留学生の特徴について、確固たる目的を持たずして留学している場合が多いという調査結果に基づいて、日本人青年女子の「留学」の意味を4つ挙げている。1つ目は「自己実現・自己拡大」で、人生の選択肢の幅が広がったため、自己の欲求を満たし、自己の可能性を伸ばすための道具としての留学、2つ目は「自己探求」で、どのように生きていくべきかについて考えるためにも、異文化の環境に入ってもう一度自己を見直し、「自分らしさ」を探す目的とし、「自己探求」の機会を求めての留学、3つ目は「親殺しの通過儀礼・自己解放」で、自己自身の生きていく方向付けを行うという、青年期のアイデンティティ形成の課題、4つ目は「存在価値の再確認・自己回復」で、留学先では違う価値観、世界観で再評価のチャンスが与えられ、自尊心の回復の機会が得られるとしている。

末弘（2006）の調査対象は米国への日本人女子留学生に限られているが、この末弘の4つの留学の意味は、日本語学校の学習者にも当てはまると筆者は考える。日本人が米国などに留学することが特別ではなくなったように、日本の日本語学校に主に在籍している中国人、韓国人にとって、日

本留学は特別なことではなくなっていると考えられる。学習者の「留学」の意味も、末弘の4つの留学の意味と同じケースが存在すると筆者は考える。

本稿での、「進路相談における学習者の自己探求」の定義は、末弘（2006）に従い、「将来自国に帰ってどのような職業生活を送っていくのかを考えるため、日本という異文化の環境に入って、進学先・専攻分野の決定をする過程を通じて、もう一度自分を見つめ直し、自分の心に存在している将来の夢・希望を意識化し、実現していく過程」とする。

筆者は学習者の進路相談にあたり、行動主義の立場に立つ「行動カウンセリング」を行うことにした。次に、進路相談における行動カウンセリングの方法をみていく。

3. 進路相談における行動カウンセリング

「行動カウンセリング」とは、中沢（1987）によると、悩み事の内容を行動概論に置き換え、問題の行動を変化させるようなカウンセリングである。行動という概念を幅広く考え、来談者の「自己観察」「自己探求」「自己統制」に関する行動を重視する考え方である。行動カウンセリングではカウンセラーが来談者に指示・助言を与え、必要な技術を指導したりすることをためらうものではなく、来談者の行動の変容のために役立つときには、指示を与えることを積極的に実践するとしている。

日本語学習者の進路相談には、来談者の「自己観察」「自己探求」に関する行動を重視する「行動カウンセリング」が適切であると筆者は考える。大学進学希望のために来日したのに自分が何のために今日本語を勉強しているのかを見失っている学習者や、自分がしたいことを自分ひとりの力では導き出すことが困難な学習者が存在する。筆者は、このような学習者と一対一での進路相談をほぼ毎日行っていた。野々村（1984）によると、カウンセラーの任務とは、来談者が自由に自己を表現し、物事を深く細かく正確に見通し、意思決定できるような、親和的な人間関係を樹立することだとしている。筆者は担当授業時間以外では常に進路相談を最優先として行い、いつでも相談に応じられるという姿勢を見せた。進路相談は、「定期進路相談」よりも「随意進路相談」が、「呼び出し進路相談」よりも「自発的進路相談」の方が主になった。「自発的進路相談」の場合、本人が精神不安定の場合が多く、筆者が今行っている仕事を中断して対応する必要があった。

進路相談の進め方の概略としては、6月に第1回目の進路相談として、来年3月に日本語学校卒業予定者全員と、一対一で日本語学校卒業後について面接をする。その際に、帰国希望か進学希望かをまず質問して、本当にそれでいいのか問いかける。進学希望者には、何についてどこで勉強したいのか質問するが、この時点で具体的に言える学習者は数名程度だった。このことから末弘（2006）の確固たる目的を持たずして留学している場合が多いという調査結果は、筆者が進路相談の対象者とする学習者にも十分当てはまると言ってよいだろう。日本語学校の学習者の「留学」の意味も末弘の4つの留学の意味と同じケースが存在すると筆者は考える。つまり学習者は、日本留学により「自己実現・自己拡大」「自己探求」「自己解放」「存在価値の再確認・自己回復」を行

うとしていると考えられる。

第1回進路相談終了後、各クラスの会話の時間に筆者が入り、入学試験の面接でよく聞かれると予想される質問について話し、特に「なぜこの学校で勉強したいのか」「なぜ〇×について勉強したいのか」の答えが大切だと注意を促す。そして都内で頻繁に行われている「留学生のための進学相談フェア」の存在を知らせ、積極的に行き、なるべく多くの学校関係者と会って実際に話をして「学校案内パンフレット」をもらってくるように話す。そして夏休み前の7月に、一対一で第2回目の進路相談を行う。

学習者は大人であり、進路決定も初めての経験ではないので、自力でまたは友人と相談して進学先を探し出し、筆者との進路相談をほとんど行わずに、進路が決定する学習者も確かに存在する。しかし学習者によっては、筆者の援助が必要となる場合もある。筆者との進路相談が必要となった学習者のうち、以下では、学習者 A, B, C 3人の進路相談の事例をみていく。

4. 学習者の「自己探求」

ここでは3人の学習者の筆者が行った行動カウンセリングに基づいた進路相談における、「自己探求」の事例をみていく。学習者 A は自分の中にある答えを否定し続けていた。学習者 B は大学で何を勉強したいのかわからなかった。学習者 C は自力で一度は進路を決めたもののそれを破棄したが、なぜ自分がそのような行動をとったのかわからなかった。これらの学習者の進路相談の経緯をみていく。

4.1 「自己解放」した学習者

まず、学習者 A（韓国人女性）の事例をみる。来日当初から A 大学の日本語学科を志望しており、6月上旬の第1回目、7月の第2回目の定期進路相談でも変化はなかった。ただ、昨年度の A 大学の「学校案内」を見て、日本語に加えて、ほとんど興味がない日本文学の勉強もできることを知って驚いていた。筆者は、日本文学は必修ではないだろうから心配無用と「助言」を行った。

12月中旬の第3回目の随時進路相談で、学習者 A は、もし面接で日本文学について聞かれたら何も答えられないと心配し、手軽に読める文学作品を探していた。筆者は、日本語についてだけ質問されて日本文学のことは全く質問されない可能性が高いから大丈夫だと「助言」をしたが、本人は「日本文学の知識が自分には不足していて、補わなければならない」という考えに縛られていた。そこでいくつかの文学作品を「紹介」した。

1月中旬の第4回目の随時進路相談で学習者 A は、小説を読んだが、何も感じることはできないと困りきっていた。筆者はどうして日本語だけに興味があるのか学習者 A にたずねた。本人は「それを考える時間があったら面接対策のために文学作品を読むべきだ」と主張した。数日後に第5回目の呼び出し進路相談を行い、筆者はなぜ日本語に興味があるのかだけ考えるように「指示」した。ここから学習者 A の「自己探求」が始まった。

1月下旬の第6回目の自発的進路相談で、A本人から、韓国語の字幕がついた日本の娯楽映画のビデオを見ていて「自分ならば違う訳をする」と思ったことなどを話し始めた。筆者は「日本語を韓国語に訳すときに生じる言葉の問題」についてのみ今は考え、その例をなるべくたくさん思い出して詳しく説明できるように「指示」した。学習者A こうして緊張がほどけ、自然体で面接試験に臨めた。

4.1.1 学習者Aの「自己探求」の過程の考察

学習者Aは第5回目と6回目の進路相談の間に、日本の娯楽映画ビデオの韓国語の字幕について気になっていることを「自己探求」により自分の中から答えを導き出した。学習者Aはこの思いを来日前から持っていたと考えられる。だが、娯楽映画は大学入試面接の話題としてはふさわしくないだろうと思いこみ、今まで否定し続けていた。全く興味がない日本文学作品を読んで苦しみ、このままでは志望大学に合格できないと悲観していた。筆者は、今はどうして日本語にそんなに深い興味を持ったのかだけを考えるように「指示」した。学習者Aは半信半疑ながらも、日本語と自分の関係についてのみ集中的に考えた。行動カウンセリングに基づいた進路相談における、筆者という自分以外の人に自分の思いが受け入れられたことにより「自分が本当に思っていることを面接で話していいんですね」と学習者Aは答えた。この発言こそ学習者Aの「自己解放」の言葉であると考えられる。

次に、大学で何を勉強したいのかわからなかった学習者Bの進路相談の経緯をみていく。

4.2 「自己実現」した学習者

ここでは、学習者B（中国人男性）の事例をみる。6月中旬の第1回目の進路相談では「大学で経済学の勉強がしたい。1時間以内で通学できて学費が100万円以下で、苦手な小論文の試験がなく入りやすい大学がいい」と言った。大学の場所や学費などの条件を重視していたことから、本人自身、何を勉強したのか今はまだわからない状態だと筆者は判断した。この状態は7月中旬の第2回目の進路相談でも変わっていなかった。経済学部がある大学を数校「紹介」したが、条件すべてを満たしている大学はなく、不満そうだった。

9月中旬の第3回目の随時進路相談では、大学で日本語について勉強したいと言う。夏休み中の日本語の勉強が思うように進まず、日本語能力に強い不安を感じていた。学習者Bの表情から、大学で日本語の勉強がしたいことは一時的な考えだと筆者は判断した。

10月中旬に3回、進路相談の機会を筆者は設けたが、学習者Bは落ち着かずすぐに帰ろうとした。第6回目の呼び出し進路相談でなんとかひきとめて第2回目の進路相談で提示した経済学が勉強できる大学3校を「紹介」した。この中に同じクラスの中国人男性が、違う学部だが受験する大学があったので「この大学にする」となげやりに言う。

12月中旬に第6回目で話題になった学習者が大学に合格し、経済学部を受験した学習者Bは不合格だった。焦りを感じたのか、学習者Bはやっと自ら進路相談を申し出た。これが第7回目の

自発的進路相談である。「経済学を勉強したいが、日本の大学で経済学を勉強している中国人はたくさんいる」と言い、困っている様子だった。勉強したいことは経済学に戻っていたが、経済学の何に興味があるのかが本人はわからなかった。そこで筆者はある大学のパンフレットの「経済学部で学べる科目」のページを見せ、興味のある科目に○をつけるように言うと、国際協力、開発経済学などに本人が○をつけたが、本人はどうしてこの科目に○をつけたのかわからなかった。ここから学習者Bの「自己探求」が始まった。精神的にかなり不安そうな様子なので以降、週2回15分話し合うことにした。

1月中旬の第11回目の自発的進路相談で、開発による経済効果について以前から興味をもち、これを学ぶことが目的で自分は日本留学にきたことを本人から話し始めた。筆者と学習者Bが共同で、本人希望条件をより満たしている大学を探し出した。勉強したいこと、進学先をはっきりと認識できた学習者Bは必死に努力し、「自己実現」をした。

4.2.1 学習者Bの「自己探求」の過程の考察

学習者Bは12月中旬から約1ヶ月間「自己探求」を行った。学習者Bが勉強したい内容は、第1回目でも第7回目でも経済学だった。このことから学習者Bが、日本留学前から今までずっと経済学の勉強を希望していたと考えられる。しかし学習者Bは、日本の大学で経済学を勉強している中国人はたくさんいると思いこみ、夢をあきらめかけていた。筆者は経済学にも様々な分野があることを示し、本人の視野を広げた。経済学部の中で興味のある科目に○をつけるように「指示」して本人の希望を「具体化」した。なぜその科目に○をつけたのか、学習者自身、自分で自分のことがわからなくなったことから、学習者Bの「自己探求」が始まった。約1ヵ月後に本人の勉強したいことが具体的になった。

最後に、自力で一度は進路を決めたもののそれを破棄したが、なぜ自分がそのような行動をとったのかわからなかった学習者Cの進路相談の経緯をみていく。

4.3 「自己回復」した学習者

最後に、学習者C（韓国人女性）の事例をみる。6月中旬の第1回目の進路相談では、観光について専門学校で勉強したいと言った。「進学相談フェア」の翌日、本人が観光について学べる専門学校の募集要項を持ってきて「家から近くて学費も安くて試験は面接だけです。昨日エントリーカードを出しました」と言う。これが第2回目の自発的進路相談となった。筆者は、自分の意志で自発的に志望校を探したことは認めたものの、条件のみで進学先を決めたことに不安を感じたが、本人は安堵した様子だったので何も言わなかった。10月下旬にその専門学校の合格通知を持ってきた。本人はとても満足そうに見えた。

ところが1月下旬になって突然、学習者Cが「相談したい」とやって来た。観光の勉強はしない、コンピュータの勉強がしたい、どこか専門学校を紹介してほしいと言う。本人がかなり慌てているので、筆者は進学先変更の理由は今回は聞かないことにして、今からでも受験できる1校を紹介

介すると、学習者Cはすぐに必要書類を揃えるために去った。これが第3回目の自発的進路相談となった。4日後に第4回目の自発的進路相談を行った。学習者Cは、面接ではどうしてコンピュータについて勉強したいか聞かれるだろうが、答えられないので困っていた。今日こそが進路変更理由を聞くチャンスと考えた筆者は、なぜ観光ではなくてコンピュータの勉強をしたくなったのか聞いたが、本人は答えられなかった。ここから「自己探求」が始まった。学習者Cは、韓国ではホテルのフロントで働いており、日本人観光客が主に来たので、日本語と観光学の学習の必要性を感じて来日したことを話した。

だが、どうして今の自分はコンピュータを勉強したいのか学習者自身もわからない。学習者Cは目標の明確化ができておらず、それに到達するための探索方法も知らない。学習者Cは進路変更と専門学校受験のやり直しがまだできる時期に、岡堂(1987)の言う青年期のアイデンティティの危機を迎えた。自分が求めているものは何か、自分が目指しているところは何かと思い悩んでいる。岡堂(1987)の、自分で進路を決めた場合でも自分が新しい課題にふさわしくないことに気付いて心理面のクライシスになった例と考えられる。今、青年期のアイデンティティの危機を乗り越えなければならない。自分がしたいことを自分ひとりの力で導き出すことが困難な場合は、筆者のような本人以外の人の「助け」が必要となる。

まず筆者は、学習者Cがコンピュータについてどんな考えを持っているのか、さぐった。勤めていたホテルではコンピュータを使って仕事していた人をうらやましいと思っていたことが「自己探求」から導き出された。このままでは観光学とコンピュータ両方に本人の興味があることになるが、本人は今では観光よりもコンピュータの勉強を希望していることは確かである。そこで、もう少し本人のコンピュータに対する考え方をさぐっていった。本人から、日本にいる韓国人たちはコンピュータを自由に使っていてかっこいい、自分はコンピュータが好きなのかもしれないと思ったことが、学習者Cの「自己探求」から導き出された。学習者Cのコンピュータへの興味が見えてきた筆者は、面接では、観光について学ぶために来日したが、日本で生活していくうちに興味が変わり、今はコンピュータの勉強がしたいと言ったらどうかと「助言」した。すると本人は、もしどうして観光について興味がなくなったのか聞かれたらどうするのか、と非常に不安そうに言った。

そこで今は観光学について勉強するつもりが全くないのか確かめたところ、あいまいな返事が返ってきたので、この部分についてもう少し学習者Cの「自己探求」が必要であると筆者は判断した。もし来日前の考え通り観光について専門学校で勉強して韓国に帰国したら何か困ることがあるのか聞いた。「困りません」と言ってから本人は考え込んだ。観光の仕事はやりがいがあり、とても楽しかったことを学習者Cは話した。本人の発言を筆者が「強化」すると、本人が急に「だめです。私は28歳です」と言う。筆者は、学習者Cが今は26歳で、専門学校を卒業する2年後には28歳になることを確認した。しかしまだ言いたい内容がわからなかった。すると本人が「韓国に帰ったら私は若くない。ホテルはだめです」と言う。学習者Cは韓国のホテルで働いていたときは20代前半で若かったが、日本留学を終えて帰国した学習者Cは本人の基準では若くないので、観光の勉強をしても帰国後にそれを生かした仕事はできないと思っていることが、学習者Cの「自己探

求」により判明した。そこで、話したことをそのままコンピュータの専門学校での面接でも言えばよいと筆者は「強化」し、進路相談は2時間後に終了した。学習者Cはこうして青年期のアイデンティティの危機を乗り越えることができ、「自己回復」をした。この経験により本人は大きく成長したと考えられる。

次に、進路相談から見てきた、学習者のアイデンティティの危機について考える。

4.4 アイデンティティの危機

学習者Cは進路変更と受験のやり直しがまだできる時期に、自我アイデンティティの危機を迎えた。そして岡堂(1987)が述べているように、自分で一度は進路を決めたのだが、自分が新しい課題にふさわしくないことに気づき、心理面のクライシスになった。もし、日本語学校卒業後、実際に進学して勉強が始まってから、アイデンティティの危機を迎えたとしたら、どうなるのだろうか。3つの可能性が考えられるだろう。「1. 不本意のまま勉強を続けて卒業する」。この場合、帰国後困ることになるだろう。「2. 日に日に授業内容に興味がなくなって欠席がちになるがなんとか卒業だけはする」。この場合、進学先での勉強は中途半端になるし、帰国後やはり困ることになるだろう。「3. 時間と学費の無駄と感じて退学する」。この場合は、日本語学校と進学先で過ごした期間分、時間的、経済的無駄となり、精神的ダメージは大きくなるだろう。来日したこと自体が無駄に感じられるかもしれない。これは数年間の自分の生き方を否定することになり、精神的ダメージは非常に大きくなるだろう。新しい道を見つけられたとしても、その夢が実現するまでには多くの時間とお金がかかるし、ストレスも多くなると考えられる。

筆者と進路相談を行った学習者は、確実に進学先で充実した学生生活が送れるという保証は残念ながらない。しかし、進学先決定を安易に考えるのではなく、本当に自分はこれが勉強したいのか、本当にこれは自分にふさわしいのかについてじっくりと「自己探求」した学習者は、進学先で、たとえアイデンティティの危機が訪れたにしても、日本語学校在籍中に、一度アイデンティティの危機を克服している分、危機対策、危機回避ができると考えられる。今まで一度もアイデンティティの危機が訪れた経験がない学習者は、進学先ではじめて体験するアイデンティティの危機による心理的ダメージは大きくなると考えられる。そのときに自力で「自己探求」できるか、学習者を援助する体制が整っているか、または学習者の相談相手が存在すれば、危機を乗り越えられるかもしれない。だが、少子化対策のために留学生を欲しがっている日本の高等教育機関に、留学生に対する発達援助は期待できなさそうだ。

おわりに

日本語教育機関で日本語を学んでいる学習者が、来日前から勉強したいことが決まっており、自力で志望校を探して、実際に受験、合格することは、成人であれば当たり前のことに感じられるかもしれない。進路決定にあたってアイデンティティの危機が必ず全員に訪れるわけでもない。しか

し、自我アイデンティティの危機は、日本語学校に在籍する学習者にも訪れる可能性は十分ある。このことを日本語教師は考慮すべきであろう。

日本語学校ではただ学習者の日本語能力向上のみを目指していればいいのではない。学習者が、発達過程上の青年期にいて、自我アイデンティティの危機を迎える可能性が十二分にあることを考慮し、日本語学校在籍中はもちろん、日本語学校卒業後も学習者たちが充実した毎日を過ごせるように、日本語教師は心理的なケアを行う必要があるだろう。

参考文献

- 井上孝代（1999）『留学生担当者のためのカウンセリング入門』外国人留学生問題研究会 JAFSA ブックレット② アルク
- 岡堂哲雄（1987）「第3章 クライアント——カウンセリングを求める人」水島恵一・岡堂哲雄・田畑治編『カウンセリングを学ぶ』有斐閣選書
- 正保昭彦（1999）「行動カウンセリング」高野清純・國分康孝・西君子編『学校教育相談カウンセリング事典』教育出版
- 末弘美樹（2006）『日本人留学生のアイデンティティの変容』大阪大学出版会
- 佃 直毅（1999）「進路相談」高野清純・國分康孝・西君子編『学校教育相談カウンセリング事典』教育出版
- 中沢次郎（1987）「第7章 行動カウンセリング」水島恵一・岡堂哲雄・田畑治編『カウンセリングを学ぶ』有斐閣選書
- 野々村新（1984）「第6章 進路相談」仙崎武編著『学校進路指導——理論と実践』福村出版